本興寺だより

令和五年
九　月
第二四九号

「この法華経もまたかくの如し。衆生（私達）の一切の苦・一切の病痛を離れ、能く一切の生死の縛（しばり）を解かしめる」

（法華経　薬王菩薩本事品第二十三）

記録的な夏の暑さも次第に過ぎ去り秋の気配が感じられます。周囲の田では稲刈りも始まりました。山も川も田も、皆生きて活動している自然界の命の不思議さと、四季があることの有難さを感じます。

九月二十三日は秋分の日。「祖先をうやまい、亡くなった人々をしのぶ」趣旨の国民の祝日です。

春分の日や秋分の日には、宮中では昔から「皇霊祭」という儀式が行われてきました。お彼岸の時期でもあり、ご先祖に感謝する風習が受け継がれています。

春は五穀豊穣を祈り、秋は収穫に感謝する。大自然の命を共有し共鳴して、その中で生かされている自己の命を実感して生きてきた先人の思いに、立ち返ることは大切だと思います。

人の一生には心配や苦悩が次から次へとやってきます。そのハードルを一つ一つ乗り越える気概や気力がだんだん弱くなり、ハードルに引っ掛かり心も身体も転倒してしまいがちです。

仏様は法華経の中で冒頭の文のように、私達の人生の一切の苦しみ・病い等を克服する智慧と力はこのお経の中に示していると説かれています。

「そんな方法があれば誰も苦労しない。こんなに努力しているのに俺の願いは何も満たされないではないか😔」と思うことは誰でもあると思います。

しかし仏様は、全ての問題は己の心がその鍵を握っているのだと云われます。人の命、心は過去・現在・未来の三世に繋がって現在を生きており、現世単独の命ではないことを自覚することだと。

私達は時間の流れを直線で考えてしまいます。過去があって、それが過ぎ去って現在があり、未来は現在が終わった後にやって来ると。法華経（妙法蓮華経）の教えは、蓮の華に命の在り様、生き方を例えています。

○蓮は、開花と同時に既にその中に実（種）を持っています（普通の植物は花が咲く時期と実（種）ができる時期に時間差がありますが）。因果は同時に進行している。また魂（心）の世界では過去・現在・未来は同時進行していると云われます。現在の一念の心の中に三世の心、業、行為が凝縮されていることを知りなさいということです。

○蓮は一輪に多くの実（種）を付けます。種が新たな花を咲かせるように、己の生き方が沢山の人に幸せを分け与えられるように。また多数の人からの信頼を得られるように仏様の教えを通して生きる真実の教えを悟りなさいということです。

○蓮は汚泥の中に進んで根を張り育ち、その中で自らは決して汚れず、清らかな華（花）を見せてくれます。人もどんな困難があっても清らかな心を保ち、忘れないことが大切なことを示しています。

○蓮は一本の茎に一つの花を咲かせます。人も、誰もが他に代われない唯一無二の存在であることを弁えて生きることです。

あらゆるお経の中で「蓮華」を表題にしているのは法華経のみです。本当の生き方は蓮華の中に示されていると云われます。

命の尊さは皆実感しています。しかしその重みは、三世の命を知らないとわからないと云われます。

仏様は心が濁れば行いが汚れると示されています。行いが汚れると信頼が失われます。信頼が失われればその人の運勢が大きく変わってきます。心の汚れは自分の命を切り刻む鋭い剣なのです。

人は無意識のうちにも、自分の考えや行動は何時も正しく間違いはないと信じています。理不尽と思われる出来事に会えば、その原因を外（他人や社会）に向けがちになり、心は内にこもってしまいます。

心が孤独になれば、社会と或いは自然とつながっている本来の自分の命を見失って、自身の力が発揮できなくなると云われます。内も外も正しく見定めて、特に自分の心をしっかりと見つめ直す中で、気付かなかった己の心の闇に光が当たると云われます。

人は皆自分の信念で生きています。他人の意見は自分の許容できる範囲でしか受け入れられないのが普通です。地面のように盤石と思っていた自分の考えが音を立てて崩れる時があります。

地震が頻繁に起こっていますが、その時に液状化現象がおきるようなものです。液状化とは、地震により地盤が強い衝撃を受け、地盤全体がドロドロの液体のような状態になり、建物が傾いたり地中の埋設管が浮かんできたりする現象です。

心も試練の地震に液状化を起こし易いのです。試練に挫折して、心の底にあった埋没していた思いが頭をもたげたり、築いてきた価値観が倒壊したりします。

人生の変化のために自分の心の自由を失い、絶えず不満や不安、心配の中に心が埋没しているのが、冒頭の「生死の縛り」だと云われます。

どんな境涯に身を置いても、安んじ得る心を持てることが「生死の縛りを解く」ということです。法華経はそういう力を与える教えであると説かれています。

人の生き方は逝き方でもあります。祖先から受け継がれた大切な命は、一生懸命に生きて、その想い、姿を伝えていくことが良い逝き方を導くのです。

秋分の日は昼と夜の長さが等しい日です。日の出の輝きをもって人生を生き、日没の美しさをもって終焉できるよう、苦も楽も等距離で冷静に見られる心で生きたいものです。合掌　本興寺住職　中谷聰秀